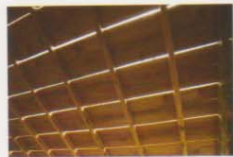


屋根の下地板は2〜3cmのすき間をあけて張ることで、小屋の中に光が入るようにした。屋根は光を通す透明な樹脂の波板で葺いている



産卵箱。ニワトリが産卵するときは、ある程度狭くて暗い場所を好む。その環境づくりのためポロ布を吊るしている



止まり木は梁をそのまま利用している。高い位置にあるので、ニワトリが上りやすいようにハシゴを掛けた



加藤さんちのニワトリたち



横斑プリマスロック
丸みを帯びた体形で、黒と白の縞模様が鮮やかな卵肉兼用種。アメリカ原産

天草大王
日本最大級の肉用地鶏。体の大きなニワトリを作出していたために導入した品種



名古屋コーチン
代を重ねているため純血ではないが、尾の黒い羽など、名古屋コーチンの特徴が出ている

「卵かけご飯です。シンプルにいくなら味つけはしょう油と醤油。贅沢に味わうなら、のり、ゴマ、とろろ昆布を加えます。最高ですよ。そうやって毎年40羽くらい

の大きなニワトリが残っています。人には懐けど外敵には強い、体

には懐けど外敵には強い、体

には懐けど外敵には強い、体

には懐けど外敵には強い、体

には懐けど外敵には強い、体

には懐けど外敵には強い、体

には懐けど外敵には強い、体

には懐けど外敵には強い、体

小屋



40羽が入るニワトリ小屋。基礎石に柱を立てた簡単な構造で、壁は全網、屋根は片流れ



親鳥が卵を温めるときの巣箱。深さは30cm程度で、下にはわらやもみ殻を敷いておく



多様な微生物が活動する発酵床が、臭気に強く健康的なニワトリを育てる。発酵のおかげで嫌なにおいもない



水飲み場。水道とつながっており、水道トイレのタンクと同じ仕組みで、水が減ると自動的に給水される

私のおすすめ卵料理



「卵かけご飯です。シンプルにいくなら味つけはしょう油と醤油。贅沢に味わうなら、のり、ゴマ、とろろ昆布を加えます。最高ですよ」



山梨県都留市 加藤大吾さん



左から加藤さん、長女の陽ちゃん、二女の悠ちゃん、長男の奏くん、奥さまの美里さん、次男の清志郎くん。自然に囲まれた環境でたくさんの動物たちとにぎやかに暮らしている



都留市に移住して最初に建てたログハウス。スギと廃材を使ったセルフビルドで、いまはゲストハウスとして使用している

庭を駆け回る40羽のニワトリは自家繁殖で増やしたオリジナル品種

取材・文／和田義典 写真 坂口克

昔の日本の農村のようなニワトリと動物のいる暮らし

山梨県都留市で農的暮らしを実践する加藤大吾さんのお宅はとてにぎやかだ。奥様とお子さん4人の6人家族に加え、犬2匹、ヒツジ4頭、ウマ1頭、そのうえ成鶏約40羽、ヒナ約20〜30羽のニワトリたちという大所帯なのだ。東京で生まれ育った加藤さんは2005年に都留市に移住し、現在の暮らしを始めた。

「自然に囲まれた暮らしがしたいというのは、ずっと前から思っていたんです。仕事の東京に理由もなかったしね。長女が生まれたことも行動するきっかけになったかな」

ニワトリを飼いはじめたのは移住してからです。自然に囲まれた暮らしを

をとり、オス1羽とメス9羽を取り寄せた。

「ニワトリを飼えば、毎日、新鮮な卵が食べられますからね。生ゴミが処理できるのもいいところ。ニワトリのエサになるんです。また、畑で野菜をつくってあげればニ



加藤さんちで飼っている馬。伝統的馬術「馬林」を実践している 右/ヒツジ。卵を取った羊毛でセーターを織むことも挑戦中





AM 3:00

夜明け前に一番鶏が鳴く。音はこの鳴き声が時計代わりだった。声はかなり遠くまで響く

ニワトリの一日



AM 8:00

ニワトリの様子を観察しながらエサやり。屑米が基本のエサだ



PM 1:00

産卵の多い午前中いっぱい産卵が終わるので卵を回収する



PM 3:00

時間は季節によって異なるが、日没の3時間ほど前に庭に放し、ニワトリの夕食タイムに



PM 6:00

庭に放したニワトリはみんな、日没前に小屋に帰ってきて止まり木に止まって寝る



ニワトリが雑草を食べてくれるので、夏でも草刈りの手間がない。ムカデなどもほとんど見られない。畑はニワトリが入らないようにネットで囲っている



育てる



野菜屑やフンが混じって発酵した鶏舎の床土(写真左上)は、そのまま肥料として使える。そうして育った野菜を家族やニワトリたちが食べ、循環していく



上/春から夏にかけて卵をかえし、毎年40羽くらいのヒナを育てている 下左/親鶏がほかのニワトリに邪魔されずに卵を温めるための個室。温めはじめてから21日でかえる 下右/うまく親鶏に卵を抱かせられない場合は、孵卵器を使ってかえすことも。かえったヒナは別の親鶏に預けて一緒に育ててもら



エサはネズミなどに食べられないようにドラム缶に入れて保管。屑米のほかに屑麦、おから、ふすまなどもやる

かえしているかな。半分はオスだから、半年経って体が大きくなったころに食べちゃうんですけどね」
加藤さんは、毎日日没の3時間ほど前になると、小屋の扉を開けてニワトリたちを庭に放す。
「夕食の時間です。庭や山の中を好きなように駆け回って、草や虫やミミズなど自然のものを食べさせるんですよ。だから、ほら、うちの庭、草がほとんど生えていないでしょ。草刈りの手間がなくていいですよ。ただ、畑だけはニワトリが入れないようにしておかなくちゃダメですけどね。瞬間的に全滅しますから」
犬もよくしつけられている。けっしてニワトリにちょっかいを出そうとしない。ヒナがヒツジの背中に載っていたり、動物同士でも仲がいい。ちょっと田舎暮らしに憧れている人なら、ニワトリが自由に庭を駆け回る加藤さんちの光景を見て、きっと思うはずだ。こんな暮らしがしてみたい、と。